〈論文〉

後古典期後期終末ユカタン・マヤ村落共同体の住民にとっての戦争の意味 *

郷　澤　圭　介

はじめに

1　先行研究の問題点

今日に至るまでのメキシコ、ユカタン半島北部の先住民族ユカタン・マヤ人の後古典期後期終末（15～16 世紀）の戦争に関する研究では、メソアメリカ軍事史学の一般的関心事の一つである「王国」に相当する政体の軍事組織の復元およびその機能性の解明に重点が置かれてきた[1)]。一次史料であるディアス・デル・カスティージョ（Díaz del Castillo 2011）やフェルナンデス・デ・オビエド・イ・バルデス（Fernández de Oviedo y Valdés 1944）、ランダ（Landa 1994）等の記述から当地の「王国」軍隊の組織構造、密林の中での機動力、包囲や奇襲における集団行動の迅速さ、あるいは弓矢や槍、丸盾等を駆使したマヤ戦士の高い戦闘力等の詳細を窺い知ることができるからである。これら年代記に加え、1579 年から 1581 年にかけて作成されスペイン王室へ提出された現地先住民の歴史や習慣についての報告書『ユカタン歴史地理報告書（Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán、以下 *RHGGY* と略記）』からも、古老のマヤ貴族やコンキスタドーレス（スペイン人征服者）の証言に基づいた様々な戦争関連情報を入手することができる。さらにフランシスコ会修道士によって植民地時代に編纂されたマヤ語語彙集にはユカタン・マヤ語の戦争用語も記載されている。これらの史料に注

目したロイズ（Roys 1972）、ハッシグ（Hassig 1992）、レペット・ティオ（Repetto Tió 1985）、テヘダ（Tejeda 2012）等によって、これまで半島北部のマヤ軍隊の全体像復元が試みられた。彼らの貢献によりマヤの戦術・戦略、戦闘隊形、戦士の階級ごとの役割等の詳細が次第に明らかとなった。

しかし彼らの問題は、戦争の背景にある先住民の社会文化や彼らの戦争に対する考え方が考慮されていないことにある。文献データの紹介と説明は確かに当該テーマの発展にとって必要な一段階であり、それだけでも評価に値することは言を俟たない。しかし、そこからもう一歩踏み込んだ「解釈」には至っていない。以下、これら先行研究の問題点につき、4 点を指摘したい。まず 1 点目は、時代も空間もかけ離れた近代軍事理論を前提として史料を解釈しようとしたこと。2 点目は、矛盾する内容の記述も混在する植民地期文書のデータの比較分析が十分に行われていないこと。3 点目に、スペイン人やクリオージョ（植民地出身のスペイン人）によってスペイン語話者のために編纂された語彙集の単語説明に対する史料批判という視点が欠落しており、マヤ語本来の意味の分析がなされていないこと。そして 4 点目は、彼ら研究者の関心が「後古典期後期ユカタン・マヤ人の戦争」だけではなかったことである。ロイズは本稿で扱われる研究テーマについて、先スペイン期マヤ文化の一側面としてのみ紹介し、ハッシグは先スペイン期メソアメリカ軍事史の中の一章としての扱いに留めている。一方レペット・ティオとテヘダは、前者二名よりも文献記録と語彙集の戦争用語を積極的に収集し、当時の先住民軍事組織の緻密な復元に成功した。しかし、膨大な史料のデータを整理した上で、これらを軍事理論的観点および旧大陸の事例から分析し復元を試みていることに方法論としての問題が見受けられる。例えば、「王国」軍のことを軍事面での最終決定権を持つ王を頂点とした階層化された一個の軍隊であったと捉えている（Repetto Tió 1985: 62–64, 79; Tejeda 2012: 130–133）。スペイン人や外部の人間から見ればそのように見えたかもしれないが、後述するように、村落に暮らす人々の戦争との関わりに注目すると、彼ら平民出身の戦士達が「王国」軍の直接の指揮命令系統下にあったという考

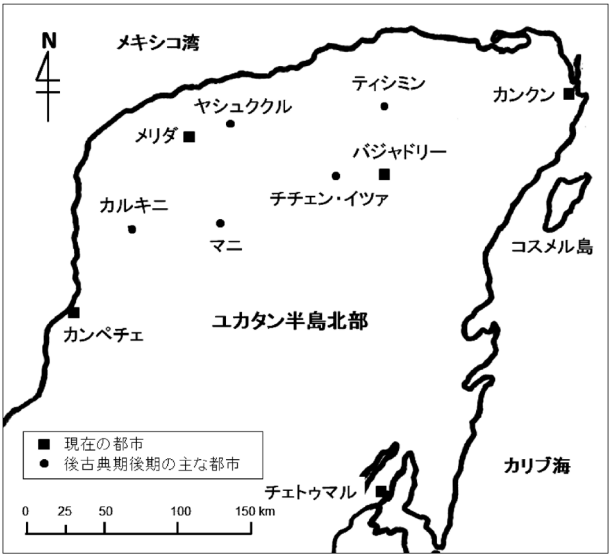

図 1　ユカタン半島北部

えには疑問が生じてくる。先行研究者達は、西洋思考を持つスペイン人やクリオージョによって書かれた歴史や語彙の説明を与件として受け入れ、それをもとに近代軍事理論を土台に復元を試みたため、その結果は西洋思考の域を脱し得ない。また、王族という権力者の視点から再構築が行われたために、マヤ庶民がどのように戦争に関わっていたかが不透明である。これらに加え、最も重要なことだが、いずれの先行研究も社会構造と軍事構造の強い結びつきを認識していたにもかかわらず、実際には社会活動についてほとんど触れることなく議論を展開している。社会システムの必要性から社会を形成する人々が起こした戦争のことを、我々は彼らの社会構造と切り離して理解することが可能であろうか。戦士の大半を占めた村の住人達を理解せずに「彼らにとっての戦争という現実」を再構成することができるだろうか。

本稿では、ユカタン・マヤ政治社会組織の基本単位である村落共同体の社会構造と人口の大多数を占めた平民の日常生活に焦点を当て、マヤ人のものの見方や社会システムを復元した上で、彼らの戦争との関わりを明らかにす

る。復元された当時の社会システムや慣習、概念をもとに史料の記述を再解釈し、村落庶民の戦争参加の動機、背景、メカニズム、戦場での行動パターンを探る。場合によって王族から見た戦争背景の説明等を加えるが、基本的には庶民の目線から彼らの戦争について考える。村落共同体とそのメンバーの日常における「戦争観」については、様々な文書に散在するデータを詳密に比較分析、さらにユカタン・マヤ語での各単語の意味を言語学的に解釈することで、その再構成を目指す。

本研究は、軍事力や一部で戦術を扱うという点では軍事史学への貢献が期待されるが、ユカタン・マヤ村落共同体とその構成員の日常から彼らの戦争にアプローチする点で、戦争社会学的視点の援用も意図されている。時代が現代から遠く隔たっているため、主として現代の戦争を対象とする戦争社会学への直接的な貢献とはならないかもしれない。しかし、近代以前であっても、戦争社会学的な発想である「戦争が社会を規定しうる」もしくは「社会が戦争を規定しうる」との前提は援用可能であるとするのが本稿の立場である。

2　史料および方法論

本研究では、冒頭に挙げた年代記や報告書等の植民地期文献を主に利用する。加えて『ヤシュककル年代記（Crónica de Yaxkukul）』や『カルキニ文書（Códice de Calkiní）』等の先住民貴族によってラテン・アルファベットを用いてユカタン・マヤ語で書かれた文書にも戦争や政治社会組織に関する言及があるため利用することができる。ユカタン・マヤ戦争研究の困難な点は、同じメソアメリカ文化圏に属するいわゆる「アステカ王国（Azteca）」の場合と異なり詳細にまとめられた戦争史料が存在しないことである。簡潔な記述が様々な文書に散見され、同じ事柄の説明であったとしても矛盾する内容も見られるため、収集したデータの徹底した史料批判を行うことが求められる。軍事に関する記述を単に引用するのではなく、生活習慣や農業等、軍事以外の記述とも照らし合わせ事実の整合性を求める。文献データがほとんど得られないテーマに関しては、同時期のメソアメリカの他の地域のデータと

比較し、共通性が高いと考えられる場合は補足的に利用する。

さらに、植民地期文書に記載されていない事柄を解釈する手段として、マヤ語の語彙集を利用した語彙分析も実施する。同語彙集は植民地期初期から中期にかけ先住民へカトリックを布教するための道具としてフランシスコ会宣教師により編纂されたもので、『モトゥル辞典（Calepino de Motul）』（以下 *CM* と略記）、『マヤ語語彙集（Bocabulario de Maya Than）』（以下 *BMT* と略記）、『サンフランシスコ辞典（Diccionario de San Francisco）』（以下 *DSF* と略記）に加え、ベルトラン・デ・サンタ・ロサ・マリア（Beltrán de Santa Rosa María）の『マヤ語文法書（Arte del idioma maya）』（以下 *AIM* と略記）の計 4 冊の主要語彙集がある。さらに、19 世紀に出版されたペレス（Pérez）の『マヤ語辞典（Diccionario de la lengua maya）』（以下 *DLM* と略記）も分析に使用することができる[2)]。これらには征服以前から生存していたマヤ人達が伝えた語彙が豊富に記録されているため、植民地期以前の議論に用いることが十分可能である。ただし、先住民の生活や宗教的態度をカトリックの礼節に則ったものに変えるのに必要なマヤ語の語彙を整える目的で編纂されたため、既存のマヤ語の言葉を組み合わせ、また新たな意味を持たせた宗教関連の新語も含まれている（Hanks 2010: 1–8, 118–241）。とはいえ、上記 5 冊の語彙集の単語・用例を丁寧に比較分析し、多義語の基本的意味を整理、解釈することで征服以降の新語かどうか判別することができる。

本稿では彼らの重要な日常概念を中心に多義語分析を試みる。一つの音形に関連のある複数の意味が対応している多義語のそれぞれの意味を比較分析することで、母語話者がその語から連想する最も基本的な意味、つまり概念を取り出すことができる（松本 2003: 135–143）。これにより、マヤ人によってその語から連想されたであろう概念（基本的意味）を再構築する。この言語学的方法は文献データに記録されなかった先スペイン期から植民地期初期にかけての先住民の日常、風俗習慣、概念を再現するための有効な手段であり、マヤ語に関してはハンクス（Hanks 2010）、ルス（Ruz 1992）、大越（Okoshi Harada 2012）等が成果を挙げている。

Ⅰ　村落共同体 *CAH*（カフ）：その一員がすべきこと

1　政治社会組織としての *cah* の特徴

ユカタン・マヤの政治社会組織は、*cah*（カフ）と呼ばれる村落共同体が、緩く結びついた集合体として機能していた[3)]。平民の拡大家族、神官を含む地元貴族集団、彼らが所有する奴隷、そしてそれらの中心に位置する首長で構成された最小の組織単位である。*cah* は首長が中心の自治体として機能し、地域住民の社会生活を支えていた。住民、とくに農耕や狩猟に従事する平民は、集落の中心から離れた周縁の森に散在していた（Landa 1994: 108; Roys 1972: 65; Farriss 1984: 125–131）。*cah* という語はスペイン語では pueblo「村」（*CM*: 101; *BMT*: 543; *DSF*: 42, 710）、barrio「地区」（*RHGGY* I: 123; *DSF*: 517）、parcialidad「（村の一部としての）集落」（*CM*: 144; *BSF*: 504; *DSF*: 517）と訳されている[4)]。しかし実際には、これに居住する人口の多さにかかわらず「一つの社会集団に属する人々が居住する空間」を指すのに使用された（Okoshi Harada 2012: 289）。そのため *cah* という語の使用範囲は広く、「王国」の王が暮らす拠点のように人口および神殿等の石造建築物の数や規模が大きい居住地のことも *cah* の語を用いて *noh cah*（ノフ・カフ）「大きな村または都市（gran pueblo o ciudad）」と呼ばれた（*CM*: 101）。しかし本稿では混乱を避けるため限定的にこの語を村落共同体を指すために用いる。

村落共同体 *cah* は隣村との線的な境界や、面的な広がりを持つ領土を有していなかった。そのような概念が存在しなかったのである。ユカタン・マヤの領域概念では、距離に関係なく政治の中心地から住人が居住または耕作してその土地用益権（占有権）が及ぶ地点までを自分達の領域と見なした（大越 2005: 141–146; Okoshi Harada 2012: 289）。つまり *cah* とは首長と周縁に暮らす住民達が社会的絆で結ばれた「対人主義」に基づく緩やかな支配域であり、領土を財産として所有する領主とその領民との関係とは異なった（*loc. cit.*）。

これらの *cah* を束ねるより大きな政治社会組織は *batab*（バタブ）と呼ばれる地方有力者が統治する *batabil*（バタビル）であった。*cah* の社会構造の

延長上にある *batabil* もやはり明確な境界や領土を持たず、*batab* に従属する *cah* の首長達とは人的ネットワークで結ばれていた（*ibid*.: 289–292）。そして、いくつかの *batabil* を束ねた最大の組織が *halach uinic*（ハラチ・ウィニク）と呼ばれる王が治める *cuchcabal*（クッチカバル）であった（*ibid*.: 299; Quezada 1993: 32–44）。これは「王国」に相当する政体であるが、*batabil*（小王国に相当）と同じく支配下の *batab* 達や *cah* の首長達と緩やかな主従関係で結ばれた集合体であった（Okoshi Harada 2012: 292–294）。

cah はそれ自体政治的に独立している場合もあったが、多くの場合、宗教儀式の恩恵や軍事的庇護を求めていずれかの強大な政体（王国）に属していた（*ibid*.: 289–293）。例えば王国が主催または指揮する祭り、宴会、戦争等のイベントがあれば王の居住地から責任者がやってきて、村落共同体の人々が王のもとに召集された（*RHGGY* I: 123）。儀式や会議の後、そして祭りの際には参加者全員に飲食物、そして貴族にはカカオ豆等の威信財も振舞われた（Landa 1994: 116–117, 159–160, 166–168; *Papeles de los Xiu de Yaxá*, *Yucatán* 2001: 57–58）。村落共同体の人々にとっては、政治宗教的権威が高い王や大神官が主催する降雨や豊作祈願の儀式に参加することでより大きな安心感が得られ、また村落が敵の攻撃を受けた場合も、強大な勢力を誇る政体の後ろ盾があれば素早い援軍と敵の撃退を期待できた。このように村落共同体の生き残りの可能性を高めるために、自ら望んで強い政体に従属することを選択する場合もあれば、軍事征服や服属を迫られてやむを得ず従属する場合もあったと考えられる。

cah の首長は *ah cuch cab*（アフ・クッチ・カブ）と呼ばれた（*RHGGY* II: 86, 322; *CM*: 16; *BMT*: 564; *DSF*: 4）。この語の原義は「村を背負う人」である（*ah* は「～する人」（*CM*: 5）、*cuch* は「背中に担ぐ」（*ibid*.: 141）、*cab* は *cah* と同義で「村」（*ibid*. : 98）をそれぞれ表した）[5]。*ah cuch cab* は貴族であったが世襲とは限らず、住民もしくは *batab* や大神官によって財力や統治能力のある人物が選出される場合もあった（*RHGGY* I: 123, 134, 390, II: 268）。首長の普段の仕事はおもに平民の訴訟調停等の村落共同体の内政であった

（Landa 1994: 114; *CM*: 16; *DSF*: 4）。共同体の会議では何事も彼の承認を得て実行に移された（*RHGGY* II: 86）。そして、中央政権に対して自分達の共同体の要望を上奏したのである（*ibid.* I: 134）。*batab* から派遣された *ah kul*（アフ・クル）も彼の仕事を補佐した（*CM*: 30, 436; *DSF*: 4）[6)]。他にも多くの地元貴族や神官達に支えられ政務を行っていたと考えられる。

植民地期初期の古老貴族達の証言によれば、後古典期後期終末のユカタン半島北部では全土で近隣の王国や村落同士で「日常的に（ordinariamente）」「継続的に（continuamente）」「いつも（siempre）」戦争をしていた（*RHGGY* I: 133, 270, 363, 378, II: 139）。そのため、村落共同体も最高統治者（*halach uinic*）やその配下の小王国統治者（*batab*）からの指示があれば首長が住人を引き連れ指揮官として戦闘に参加し、また自分達の判断で近くの共同体を攻撃、もしくは敵の襲撃から村を防衛することもあった（*ibid.* I: 123, 252–253, 269, II: 85, 246）。

2　*KOCH*（コッチ）：首長と臣民の「義務」

村落共同体の平民には、首長への貢納義務があった。そして、首長に対する義務の中には兵役も含まれていた。貢納に関しては主従関係を認めるためのものだったため、その品目や量は各人に一任されており、払える範囲で払えばよかった。ただし、これを全く無視し貢納義務を怠った場合は生贄にされることもあった（*ibid.* I: 94, 252, 286, 378）。一方で、兵役に関しては平民に一様に課され、依頼があった時には必ず、武器を持ち戦いに臨まねばならなかった（*ibid.* I: 94, 378）。また、ユカタン・マヤ社会では共同体の臣民だけでなく首長も臣民に対して様々な義務を負っていた。ユカタン・マヤ語語彙集では「義務（スペイン語で obligación）」は *koch*（コッチ）という語で表された（*CM*: 428; *DSF*: 196）。日本語の「義務」という言葉には強制的で拘束をともなう責務というイメージがある。そのため、ユカタン・マヤ人の間での *koch* の概念を明確にする必要がある。まずは「義務 obligación」の用例を見てみよう：

I-2. 1. *ma bahun u koch bataboob*（マ・バフン・ウ・コッチ・バタボオブ）「カシーケ（統治者）には対応すべき義務がたくさんある（muchas son las obligaciones de los caciques, mucho tienen a qué acudir）」（*CM*: 428）[7)]

I-2. 2. *oczah koch*（オクサフ・コッチ）「貢物を納める、または義務付けられているものを払う（pagar el tributo y a lo que uno está obligado）」（*ibid.*: 583）[8)]

I-2. 3. *koch miz beil*（コッチ・ミス・ベイル）「個人が請け負う、道をきれいにする役目または義務（pertenencia［u obligación］que le cabe a uno de limpiar［los caminos］）」（*BMT*: 517）[9)]

例 I-2. 1 は住民生活の保護や争いごとの調停等の統治者（例文では *batab*）の責務、例 I-2. 2 と I-2. 3 は庶民の義務を表している。他方で「義務」の概念とは一見異なる *koch* の意味説明がいくつか見られる。その中でも以下に示す 2 つの意味グループの意味は、ユカタン・マヤ人が *koch* の語に抱いていた概念を理解する鍵となると考えられる：

意味グループ①：自明の理、確実な実行

I-2. 4. *koch*「必ず起こり、果たされるべき確実なこと（infalible cosa, que no puede faltar ni dejar de cumplirse）（*BMT*: 428）、「真実、確実に起こること（cosa verdadera o que sale verdadera, infalible y cierta）」（*CM*: 428）、「真実、真実の（verdad, verdadero）（*DSF*: 196）

I-2. 5. *koch uayak*「現実となって果たされる夢（sueño verdadero, que se cumple y sale verdadero）（*CM*: 428）[10)]

これらの語の説明からは、「自明の理、自然なものとして確実に果たされるべきこと」という *koch* の語が持つ一概念が示されている。「あることが実際に果たされない、ということはあってはならない」という基本思想を表していると考えられる。一方で、以下は *koch* のもう一つの概念を表す意味グループである：

意味グループ②：担ぐ

I-2. 6.　*koch*「十字架や丸太のようなものを頭上や肩に担いで持っていく、または持ってくる（llevar o traer sobre sí o en hombros como una cruz, madero o cosas semejantes）（*CM*: 428）、「長いものを頭上に載せ持っていく、または持ってくる（llevar o traer sobre sí cosas largas）」（*BMT*: 452）

I-2. 7.　*koch che*「肩に棒や担架を担いで何かを運ぶ（llevar en hamaca algo en un palo［al hombro］）（*loc. cit.*）[11)]

I-2. 8.　*kochchetah*「肩に棒や担架を担いで持っていく、または持ってくる（llevar o traer en algún palo al hombro y llevar así en hamaca）（*CM*: 429）[12)]

I-2. 9.　*koch chetah; koch chetah ti yab kaan*「歩けない病人を担架で運ぶ（llevar un enfermo en hamaca porque no puede andar）」（*DSF*: 196）、*koch che tex kohan ti yaab kaan*「病人を担架で運びなさい（Llevad al enfermo en la hamaca）」（*BMT*: 452）[13)]

上記の例は、長いもの、とくに丸太や担架のように一人ではなく二人以上で運ぶべきものを担ぐ行為を表しているという点で共通している。

この「自明の理、自然なものとして確実に果たされるべきこと」と「二人以上で運ぶべき長いものを担いで運ぶ」という二つの意味は一見無関係なように見える。しかし、*koch* という語が持つこれらの意味からユカタン・マヤの「義務」について検討してみると、次のことが言える。第一に、彼らにとっての「義務・責務」とは、共同体に属する者が必ず自然に果たすものであり、強制的という概念を伴っていなかったということである。この「当たり前に果たされるべき」非強制的責務は、ユカタン・マヤの社会秩序を乱さないための当然の行為であったと考えられる。彼らの社会では、盗み、殺人、姦通等、社会秩序を乱す犯罪に対してはたとえ首長や貴族であっても厳罰に処された（Landa 1994: 119, 125, 130–131, *RHGGY* II: 216, 270）。例 I-2. 2 に示された庶民の貢納は、臣民が調停者、秩序の保護者である権力者に対して果たす責務である。したがって、本項冒頭で挙げたような、*cah* の一員と

して当然果たすべき貢納の責務を無視した者も、犯罪者同様に厳しく処罰されたということである。他方で例 I-2. 1 の首長の責務は、善政を施し平民を思いやる等、村の秩序維持に努めることであり（Landa 1994: 95）、これも村を統べる者として当たり前に果たすべき行為であった。他にも *koch* には「（道徳的）責任、罪（culpa）」という意味もある（*CM*: 428; *DSF*: 196）。しかし、これが「自明の理、自然なものとして確実に果たされるべきこと」という *koch* の基本的意味を理解した宣教師が意味を拡張させ、「罪の意識」というカトリック教義を教えるために作った新語かどうか不明であるため今回は分析対象としない。とはいえ今後詳しく分析する価値はある。

第二に言えることは、社会が必要とする仕事や負荷を分担、即ち相互依存によって実施する義務のことを肩や頭で「担ぐ」という行為で表していた可能性があるということである。庶民が貢納する品物は当然一人ではなく家族や隣人同士が協力して生産・獲得された。例えばトウモロコシ生産のためのミルパと呼ばれる焼畑農耕では、森林伐採、火入れ、播種等、個々の世帯主の能力を超える作業は、近隣住民が総出で手伝った（*RHGGY* I: 135, 149; Landa 1994: 118）。そして一世帯分のミルパが完成すると、今度はこの集団労働に参加した別のメンバーの耕作作業をグループ全員で手伝う、というようにローテーションで行われた（*loc. cit.*）。この作業に対する報酬はなかったが、参加者には作業時に飲食物が振舞われた（*RHGGY* I: 381）。互酬または相互扶助と呼ばれる住人が協力して交代で行う集団労働システムは世界各地で見られるが、後古典期後期終末ユカタン・マヤ社会でもやはり基本的生産手段として機能していたと征服期後の社会から推測できる。他にも、子供の結婚式や先祖供養等の親族同士での祝宴では、主催者が飲食物をすべて提供し、見返りは求めない。その代わりに招待された人が次回祝宴を開く際は、その人がやはり参加者に無償で振舞った（Landa 1994: 117）。個人的ではなく集団的で、グループメンバー全員の利益に関わる責務であった。例 I-2. 3 も、生い茂る植物ですぐに閉じてしまう熱帯地域の村の道路を整備するという住人が協力し交代で行う日々の労働義務を表している。一方で、首

長や王が権力者として臣民に対して果たす責務も、協力者なしには実行できなかったという点ではこの概念を共有していると言える。村の行政や宗教儀式、祭りの主催や供物のおすそ分け等の統治者の義務もやはり彼一人では実行できす、多くの臣下の協力があってこそ可能だったからである。

住民の統治者に対する貢納や兵役という *koch*、そして統治者の住民に対する貢納の再配分（返礼）、善政、生活の保護という *koch* が滞りなく、確実に実施されることで重層的な双務的関係が成立し、共同体としてのまとまりが維持されたのである。以上をまとめると、ユカタン・マヤの「義務・責務」*koch* には「自然なものとして確実に果たされるべき、二人以上で協力して担ぐ負担（荷）」という概念があったと見ることができる。

このような一定グループ間で日常的に負担を分散し、順番に助け合い互いの労力や経済的負荷を軽減する互助形態を通して、近隣住民や親族内での仲間意識（絆）や団結（団体精神）が生まれた。ランダ曰く、ユカタン・マヤ人はこのような交流を通して育まれた絆を非常に大切にし、互いにどんなに遠く離れて暮らしていようともこれを維持した（*ibid*.: 117）。また、各村には四方が開放された大きな「若者の家」があり、青少年達が球戯やゲームをして結婚するまで寝食を共にしながら共同生活を送っていた（*ibid*.: 131）。この共同生活を通して結ばれた絆もまた共同体メンバーとしての連帯感を強化するのに貢献したことは間違いない。拡大家族の絆、共同体内互助グループの団結心、再配分や善政を通した首長への信頼、儀式や祭りでの様々な体験の共有による村落共同体全体の重層的な連帯感が、平民に一様に課されたもう一つの *koch* である兵役でも発揮されたと考えられる。

Ⅱ　戦争に備えて

1　戦士の召集

徴集された平民戦士は武器を持参し首長のもとに集合した（*RHGGY* I: 94; Landa 1994: 130）。王族や貴族の戦士は色とりどりの羽根で着飾り（*RHGGY* I: 123）、綿製の防御胴衣（ユカタン・マヤ語で *cuyub*（クユブ）、メキシコ中

央高原のイチカウィピリ（*ichcahuipilli*）に相当）、チャートや黒曜石の刃を埋め込んだ諸刃の木剣（同 *haɔab*（ハツァブ））等（Landa: 97; *RHGGY* I: 271, 319; *AIM*: 305–306）、職人が製作する手の込んだ武器や防具を使用していたが、平民はこれらを使用せず「ほとんど裸で」闘っていた（*RHGGY* I: 95, 319）[14]。平民が使用した弓矢、背丈程度の長さの短槍、丸盾、幾重にも腹部に巻きつけた綿布等は簡素なものであったため、彼らの武器はすべて村周辺で入手可能な材料を使い庶民自身が製作できたであろう[15]。

前述のように、戦時の兵役は健康な成年男子が首長に対して果たすべき労働義務であった。ではこの軍役はどのようなシステムで行われていたのであろうか。*RHGGY* の記述に「戦争に行くべき年齢なのに行かない者は代わりに自分の農作物の一部を戦士に供出した。そして戦利品の分け前に与れなかった（*ibid.* I: 378）」とある。この記述をテヘダとレペット・ティオも引用しているが、戦争に参加しなかった男性の役割については分析していない（Tejeda 2012: 137; Repetto Tió 1985 : 23, 80）。この記述を、単に戦闘を恐れ、出征をためらった男のことではなく（もちろんそのような男もいたかもしれないが）、村落共同体の集団労働システムを反映した徴兵のローテーションについての描写と捉えるべきであろう。労働を順番に公平に負担するという概念が根付いていた社会だったので、多くの成人男性が出陣した一方で、残りの人々は軍の糧食供出に加え、村の留守を預かり防衛を担い、女性や子供、老人を守る役割を果たしたと考えられる。その代わりに次回戦争が起きた場合は、守備に回った男達が出陣する、というように敵攻撃と村落警護の任を順番に負担し、「日常的に」発生した戦闘という個人に対する負荷の軽減および均等化を図ったのであろう。

これまでの議論で、戦士としての戦争参加はたとえ中央政体（王国）からの命令であっても庶民にとっては自分達の村落共同体の集団労働として認識されていたと述べてきた。では、この労働に対して現代のように給料は支払われたのだろうか。植民地期文書によると、戦士としての給料は支払われなかったし、褒美等もなかった（*RHGGY* I: 133, 269; Landa 1994: 130）。その代

わり個人による戦利品獲得や軍全体の戦利品の分け前が報酬に相当した。これは庶民にとっては普段の生活で得ることのできない「臨時収入」だったので、参加の大きな動機となったことであろう。

一方で、各村には *holcan*（ホルカン）と呼ばれる選ばれた人々がおり、いざという時には武器を持って駆けつけた（*loc. cit.*）。語彙集の説明によると *holcan* という語には以下の意味があった：

II-1. 1.「大胆な、勇敢な、豪気の、兵士（animoso, valiente, esforzado y soldado）」（*CM*: 321; *DSF*: 145）

II-1. 2.「戦士（guerrero）」（*loc. cit.*）

ランダの記述からは、基本的には彼ら *holcan* だけで戦い、彼らだけでは戦力が足りない場合に平民の中からさらに戦士を召集したことがわかる（Landa 1994: 130）。続けてランダの記述を引用すると、非戦時中には給料（soldada）が払われず、戦争があった場合も指揮官が自腹で僅かばかりの「貨幣（moneda）」を与え、村からも援助が出たという（*loc. cit.*）[16]。ハッシグやレペット・ティオは、この記述をもとに後古典期後期ユカタン・マヤには徴集される平民戦士とは別に給料を貰い働いた職業軍人が存在したと解釈し、さらにレペット・ティオは彼らを常に手元に置いておく必要があったために常備軍が存在したと結論付けている（Hassig 1992: 160; Repetto Tió 1985: 80–81）。しかし、そもそもユカタン・マヤには給料という概念が存在しなかったと我々は考える。

語彙集には「給料、日給（salario, jornada）」に相当する語に *mac kabil*（マック・カビル）（*CM*: 483）、*nahalil*（ナハリル）（*CM*: 546; *BMT*: 363, 470）、*boolil*（ボオリル）（*CM*: 90; *BMT*: 411）等がある。しかしながら、これらの語の多義語分析を行った結果、それぞれ「給料」の意味とは別に、「手作業に蓋をする（poner tapa a la obra）」「～に値する（merecer）」「望みや欲を満たす（satisfacer a la voluntad y deseo）」という意味を持っていたことがわかった（Gozawa 2017: 43–48）[17]。このことから、上記の語は当時「給料」を表す言葉がマヤ社会に存在しなかったために、宣教師または植民地期のマヤ人が先スペイ

ン期から使われていた語の意味を拡張、または語を組み合わせて作った新語や造語（*mac kabil* は「共同体作業では一日単位で区切ることが不可能だった労働を日ごとに「蓋」をして行う支払い」、*nahalil* は「個人労働という新しい価値に対する支払い」、*boolil* は「個人労働に対して報酬を受け取るという新しい望みに応える支払い」）であった可能性が考えられる（*loc. cit.*）[18]。

レンケルスドルフ（Lenkersdorf）による現代トホラバル語（tojolabal）の分析によれば、「仕事」を意味する語には共同体の利益のために無償で行う仕事「*'a'tel*（アテル）」と、農園等で日当を貰って行う仕事「ganar（ガナール）」の二種類がある。後者はスペイン語からの借用語である。先スペイン期のメソアメリカ社会では、自分の所属する村落共同体内で、共同体の人々のために働くことが労働であり、その成果に対して報酬を求める習慣はなかった。しかし、スペイン人により西洋思考が持ち込まれたことで労働が「商品」と見なされるようになり、個人の労働に対する支払い、つまり賃金労働が普及し始めたのである（Lenkersdorf 2006: 19–24）。

以上のことからも、賃金で養われる職業軍人という考え自体ユカタン・マヤには馴染まなかったことが考えられる。前述のランダによる戦士 *holcan* の記述は、戦士を本職とする人々のことではなく、例 II-1. 1 が示唆するように村落共同体の中でより勇敢で力自慢、もしくは戦士としての経験豊富な歴戦の兵のことで、彼らが率先して、または皆から推されて優先的に戦場へ向かったのではないだろうか。ただし、彼らも立て続けの戦闘や負傷により体力が衰えた場合は、ローテーションの一環として村の防衛に回った可能性もある。

2　戦闘部隊

後古典期後期から植民地期初期にかけてのユカタン・マヤ人は戦闘時に部隊（当時のスペイン語で escuadrón）単位で行動していたことが記録されている（Díaz del Castillo 2011:7, 10; *RHGGY* I: 271, II: 296）。ユカタン・マヤ語で部隊に相当する語に *tzucul katun*（ツクル・カトゥン）がある：

II-2. 1.　*tzucul katun*「戦士の部隊（escuadra o escuadrón de gente de guerra）」

（*BMT*: 328）

katun は「戦争」（*BMT*: 140, 376; *DSF*: 184, 624; *AIM*: 308）または「戦争の部隊、軍隊、戦場での兵士達（batallón de gente ordenada de guerra y ejército así, y soldados cuando actualmente andan en la guerra）」（*CM*: 413）を意味する。*tzucul* の*-ul* は「固有の、特有の」を表す接尾辞（*BMT*: 30–31）である。形態素 *tzuc* の語彙集での説明には以下のようなものがある：

II-2. 2.　*tzuc*（ツック）「村、一部分、段落、品物、理由、違うもの、語、山積みのものを数える助数詞（cuenta para pueblos, para partes, párrafos, artículos, razones, diferencias, vocablos y montones）」（*CM*: 201）、「部分、全体の一部（partes, compartimientos）」（*loc. cit.*）、「低木の小さな森（montecillo de árboles pequeños）」（*loc. cit.*）

II-2. 3.　*tzuccinah*（ツクキナフ）「別にして置き、山積みにする（poner aparte y amontonar）」（*loc. cit.*）[19]

つまり、*tzuc* には「全体を構成する一塊」という基本的意味があり、グループ全体の中の個々の小グループを表したということがわかる。したがって *tzucul katun* の原義は「軍隊全体の中の一部隊」ということになる。王国軍という全体を構成すると同時に「一塊」として行動した戦闘単位という意味を持つ語であった。

語彙集を含む植民地期文書にはこの語以外に部隊の特徴に関する記述はない。そのため構成人数等の部隊の詳細を特定することは困難である。スペイン人が報告書や年代記等に敵先住民戦士の人数を記しているが、数字等のデータは自身の手柄を大きく見せる目的で誇張されることが多かったために信憑性に欠ける（Tejeda 2012: 141–142）。また、視界が悪い密林や、湿地に囲まれた土地での戦闘では誰も敵の正確な人数を把握することはできなかったであろう。

では部隊 *tzucul katun* は一体どのような人々で構成されていたのだろうか。これに関しては第 I 章 1 項でも軽く触れたが、「戦争になると国王に従属する首長達は支配下の人々を率いて参加するのが義務であった」（*RHGGY* I:

123, 253, 269, 306, 412, II: 246）という記述から、一つの村落共同体が一部隊 *tzucul katun* として機能していたことが推測できる。王国が支配域の小王国や村落の人々を率いて行う会戦では、首長 *ah cuch cab* が部隊長となり住民を引き連れ参戦したことはほぼ間違いない。他にも *nacom*（ナコム）と呼ばれる 3 年任期で住民に尊崇された戦闘指揮官も部隊を引率した（Landa 1994: 127, 130; *RHGGY* II: 324）。また『ヤシュククル年代記』には、ペッチ（Pech）家がヤシュククル村を征服した際に従軍したメンバーの中に首長の補佐であった *ah kul* も多く含まれていることから、彼ら村落貴族達も戦闘指揮官として首長と行動を共にしたことがわかる（*Crónica de Yaxkukul*: 11–12, 23）。では、日常生活での人間関係を最大限活用した共同体単位の部隊が、いかに効率的な行軍や戦闘に適していたかをこれから見ていこう。

3　戦争を意識した日常的行事

「アステカ王国」の場合、平民も含めた若者が軍事学校に入学し、ベテランによる厳しい訓練が行われていたことが知られている（Sahagún 2006: 201–203, 458; Durán 2006 II: 163）。他方で、後古典期後期終末ユカタン・マヤの軍事演習や個人の戦闘技術訓練に関する明確な記述はこれまで見つかっていない。ただ、近隣政体との実戦によって戦士達が鍛えられていたことは容易に推測できる。「アステカ王国」の記録には、若者だけで構成された部隊が恐怖を克服させるために予備隊として戦場で後方に配置され、また老練戦士の付き人をさせその動きを見学させたこと等が述べられている（Sahagún 2006: 458; Durán 2006 II: 166, 304）。ユカタン・マヤの間でも、実戦未経験または経験が少ない若者にとっては戦場に出ること自体が戦闘の良いトレーニングとなっていたであろう。

では、ユカタン半島北部で実戦以外にどのような訓練が行われていたのであろうか。戦闘訓練として利用された可能性のある行事として我々が注目したのは、日常的に行われていた集団狩猟である。この集団狩猟のプロセスと語彙分析により復元された狩猟概念から、戦場での行動パターンや行動の基

本となる考え方との共通点を見出すことができる。

集団狩猟の一種である巻き狩りは、年に数回行われる共同体全体の行事であった（Landa 1994: 114）。この組織的活動はメソアメリカ文化圏で幅広く行われていた。共同体の規模にもよるが、ユカタン半島北部の記録では一度の狩猟に 50～100 人以上の住人が参加した（*RHGGY* I: 115, 240; Landa 1994: 118）。この狩りは一日に数回繰り返し行われ、最高で 30 頭のシカに加え、イノシシ等その他の獲物も獲れた。この先スペイン期からの伝統的狩猟方法は、弓矢が猟銃に変わった以外はほぼ同じスタイルで現代でもユカタン・マヤ人の間で受け継がれている（Montiel Ortega, Arias Reyes, Dickinson 1999: 45–47）。メソアメリカでは巻き狩りは山岳地帯や平野部等あらゆる地形の中で実施されていたが、ユカタン半島北部の平坦な地形と密な植生はこの狩猟法に最適であった。同時にこの自然環境は戦時の奇襲攻撃にも効果的であった。狩猟自体は軍事を目的とした行動ではなかったが、伏兵、不意打ち、包囲等の戦術トレーニング、弓矢の鍛錬、偵察のトレーニング等実戦での動きを、戦場を想定しながら確認することができたのである。

巻き狩りの手順であるが、勢子と射手の二手に分かれ、各グループに経験豊富な狩猟リーダー 1 名がつき指揮した。全員が指示や合図に従い整然と行動し、集団で協力して獲物を一ヶ所に追い詰めた。リーダーが獲物を仕留めるポイントとなる狩場を決め、射手はその場を半円状に囲み均等な間隔を保ち構える。勢子は外周から射手が待つ地点に向かって輪を狭めつつ大声をあげて近づく。偵察も使って獲物となる動物の位置を知らせた（*CM*: 23）。最後は逃げ惑う多くの動物を囲いながら追い詰め、待ち構えていた射手が仕留める（Montiel Ortega, Arias Reyes, Dickinson 1999: 47）。しかし、儀式での供犠用に生きたシカを確保する必要があったため、殺すより生け捕りの方が好まれた。食用に殺した獲物の肉は、首長へ献上する分を除き参加者全員に平等に分配された（Landa 1994: 119）。

「巻き狩り（スペイン語で levantar la caza, ojear la caza）」はユカタン・マヤ語で *ppuh*（プフ）と呼ばれた（*CM*: 670; *BMT*: 161; *DSF*: 317）[20]。この語は単

に巻き狩りを表すだけではなく、以下のように様々な意味を持っていた:

II-3. 1. *ppuhul*（プフル）「騒動、騒乱、暴動、反乱、武装した人々の騒ぎ（alboroto, bullicio, sedición, motín y ruido de gente armada）」（*CM*: 671）「人々の騒ぎ、騒ぎを起こす（ruido de gente,［y］hacer ruido）」（*BMT*: 577）

II-3. 2. *ppuhah*（プハフ）「人々を煽る（alborotar gente）」（*CM*: 671）

II-3. 3. *ma a ppuhic in cahal*（マ・ア・プヒク・イン・カハル）「私の村の人々を煽らないでくれ（No alborotes a la gente de mi pueblo.）」（*loc. cit.*）[21)]

II-3. 4. *ppuhzah ool*（プフサフ・オオル）「怒らせる（provocar la ira）」（*loc. cit.*）

II-3. 5. *ppuh cimil*（プフ・キミル）「病気を再発させる（alborotar la enfermedad que ya había cesado, hacer que vuelva）」（*loc. cit.*; *DSF*: 318）、*ppuhzah chacauil*（プフサフ・チャカウィル）「再度発熱させる（provocar la calentura, hacer que vuelva otra vez）」（*CM*: 671）

これらに共通する基本的意味は「平常だった対象を突如煽って、騒ぎと混乱を引き起こさせる」である。巻き狩りであれば獲物となる動物、騒動の場合は人々、特に集落の村人等が対象となる。例 II-3. 4 では、人の心 *ool*（*ibid.*: 595–596）を煽り平常だった相手の怒りを掻き立てる、例 II-3. 5 では、いったん治まった病気 *cimil*（*ibid.*: 122）や熱 *chacauil*（*ibid.*: 224）が何らかの原因で煽られ再び悪化することをそれぞれ表した。つまり、静の状態のものを動の状態に、秩序から混沌に急激に移行させる行為という概念を表す語が *ppuh* だったことが理解できる。

この概念は巻き狩りの基本思想を表すが、同時に戦争での攻撃概念でもあった。戦争では精神的要素が勝敗に占める割合が大きい。奇襲や側面・背面攻撃は精神的効果が高く、危険を察知できない状態で攻撃を受けると人には本能的にあるいは知性を通じて恐怖や不安が生じることはすでに周知の事実である。敵軍が森の中の道を行軍、もしくは陣地や村で休息中に彼らの秩

序を乱せば一瞬の隙が生じる。この平静と沈着を失ったところに僅かに生じた弱点を衝くことが、戦闘の機先を制する鍵となる。実際ランダも、彼らは静かに行軍し、油断した敵に遭遇すると大声を上げ突撃したと述べている（Landa 1994: 130）。森の中で穏やかに過ごしていた動物を突然の大声で驚かし、恐怖や怒りに駆られた状態にして追い詰めるのと行動パターンも非常に近い。密な植生という環境により視界が遮られていたことも、戦士達の恐怖をさらに煽ったことであろう。

他にも狩猟と戦争の類似点を示す語がある：

II-3. 6.　*ah meknak ppuh*（アフ・メクナク・プフ）「狩猟または巻き狩りに行く人々の指揮官（capitán de gente, que va a caza o montería）」（*CM*: 34）

II-3. 7.　*ah meknak katun*（アフ・メクナク・カトゥン）「戦争での指揮官（capitán así en la guerra）」（*loc. cit.*）

いずれも集団をまとめ引率するリーダーを意味する。前述のように *ppuh* は「巻き狩り」、そして *katun* は「戦争」を表す語である。*ah* は「〜する人」を意味する（*CM*: 6, *BMT*: 30）。そこで *meknak* を認知意味論的に形態素に分けて分析する必要がある：

II-3. 8.　*mek*「両腕で抱え込む、抱きかかえて運ぶ（abrazar, llevar o traer en brazos）」（*CM*: 518）

II-3. 9.　*nak*「近づける、寄せ集める、くっつける（arrimar o allegar, apegar o pegar）」（*BMT*: 116; *AIM*: 196）、「とても近くに並んだ、近づいた（junto, por muy cerca o arrimado）」（*BMT*: 414）

II-3. 10.　*nak*「腹部（la barriga, vientre o tripas / barriga o panza de cualquier animal）」（*CM*: 549; *BMT*: 138）

II-3. 11.　*nakbezah*（ナクベサフ）「ミルパの雑草等を燃えやすくするために寄せ集め山にする（allegar y juntar las yerbas y cosas así de la milpa en montones para que fácilmente se quemen）」（*CM*: 550）[22)]

以上の例から、形態素 *mek* には「両腕で抱え込む」、*nak* には「近くにぴったり寄せ集める」もしくは「腹部」という基本的意味があることがわか

る。つまり *ah meknak* で「何かを近くに寄せ集めて（または腹部に）両腕で抱え込む人」という意味になる。狩猟の場合は自分のグループの人々をまとめ上げ、両腕で包み込むように責任をもって現場で指揮した人物、そして戦争の場合は同様の責任感で配下の戦士を統率した人物を指したことが窺える。巻き狩りの指揮者がそのまま戦場でも指揮官の任務を担ったかは不明だが、同じ村落共同体の人々を部隊として率いたのであれば、そのような人物がいたとしても不思議ではない。平民ではなく村の地元貴族が着任したかもしれない。集団狩猟で育まれたチームワークと互いの信頼関係はそのまま戦場でも発揮され、彼らのリーダーは仲間の窮地には臆せず救助に向かったことであろう。

巻き狩りには食肉の調達、生贄儀式で使用する獲物捕獲、集団行動のトレーニングという 3 つの社会的意味があった。集団行動に関しては、密生した森や灌木林、湿地帯が多いユカタン半島北部特有の自然環境での奇襲、待ち伏せ、敵の包囲に欠かせない技能である音を立てずに移動する、合図を理解し従う、大声で敵を驚かす、敵を指定の位置に追い込む、敵を正確に狙い撃つという各能力を、実戦で命の危険に晒されることなく磨くことができた。また、若者にとっては実戦前に集団行動の経験を積み、基本動作の合図を覚えることができたのである。

Ⅲ　駆け引き，そして開戦

1　戦争開始か回避か

ユカタン・マヤ社会の人々の根源的な願いは、彼らの儀式と祭りに関するランダの記述を要約すると、食糧不足に悩まされることなく、病気をせず健康に、秩序が保たれた一年を過ごすことであった（Landa 1994: 144–182）。その実現のために、予言で良い年であっても悪い年であっても神々に祈り、供物、踊りを捧げ、彼らの生活秩序を乱す悪い出来事が起こらないよう願った（*ibid.*: 140–182, 195–196）。とりわけ彼らは死の到来を恐れていたため、農作物の不作を引き起こす旱魃とこれに伴う飢饉が発生するかどうかは毎年

の心配事であった（*ibid*.: 136, 144）。ランダによると、激しい旱魃の年には飢えた村人達が近隣の村落から食糧を盗み、奴隷を（もしくは村人を奴隷として）売るために連れ去ったことが発端となり戦争になったという（*ibid*.: 144）。各村には不作の年に備え穀倉がありトウモロコシ等の穀物が保管されていた（*ibid*.: 208; *CM*: 652; *BMT*: 624; *DSF*: 757; *AIM*: 317）ため、これが主な標的にされたのであろう。奴隷にするための捕虜獲得のために戦争をしていたという記述は *RHGGY* に多く見られる（*RHGGY* I: 124, 133, 146, 165, 271, 378）。

しかし、戦争の原因は飢饉による食糧不足を背景にした他村落からの掠奪だけではなかった。*RHGGY* に記載があるだけでも土地争い（*ibid.* I: 270, 286, II: 85）、女子供が連れ去られた（*ibid*. II: 85）、臣下や服属している村落が侮辱や酷い扱いを受けた（*ibid*. I: 270, II: 246）、掛けで売ったものの支払いをしない（*ibid*. II: 85, 324）等、日常のいざこざを含む様々な要因で、時には小さな衝突から隣村同士の紛争へと発展した。このため戦争が「日常的」であったとマヤ貴族古老が証言したのであろう。土地争いに関して言えば、第 I 章 1 項で述べたように、各村落の境は住民の土地占有権が及ぶ範囲を意味した。実際に土地を所有していたのは統治者ではなく、森林に手を加えミルパにすることによって土地に対する用益権を持っていた庶民であった。明確に線引きされた境界や領土を持たない対人主義に基づくユカタン・マヤの支配域では、土地を守ることは「領土」を守ることではなくそこに暮らす臣民の利益を守ることであった。一方掛売りに関してだが、この習慣は期日までに必ず払うという他村の人々との互いの信頼関係で成り立っていた。しかし中にはいくら催促されても支払いをしない者がいたようである。その場合、約束を反故にされた者は自村落の人数を集めて支払いを渋る者が住む村に押しかけ、彼のグループと喧嘩になった。そして押しかけた者達が負傷して帰ってきた場合には、今度は首長または先述の指揮官 *nacom* が武装させた住人を率いてその村へと向かった（*RHGGY* II: 85, 324）。統治者の臣下が他の村の人々から手酷く扱われた場合もそうだが、史料に挙げられて

いる戦争の原因の多くからは、重層的連帯感、双務的関係で結ばれた共同体に属する人々の利害や秩序ある生活を守るという首長や王の責務が果たされた結果、戦争へと発展していたことが理解できる。

一方で、近隣村落同士の争いとは別に、王国レベルでの支配域拡大争いも繰り広げられていた。王権の確立と王国維持のために、王族とその臣下貴族は肥沃な土地の管轄、貢納ネットワーク（双務的関係で結ばれた人々とのネットワーク）の拡大、威信財および塩等の需要の高い物品の生産地や交易ルートの確保を目指した（Gozawa 2017: 58–67）。例えばシウ家（Xiu）は年間湿度と降雨量の安定したプウク山麓（serranía Puuc）の肥沃な地、チェル家（Chel）とペッチ家（Pech）は沿岸部の塩田地帯を征服し、それぞれの拠点を築いた（Okoshi Harada 2012: 292–293, 295; Gozawa 2017: 69–78）。*RHGGY* では塩田支配（*RHGGY* I: 270, II: 258）、そして海岸の他の村々との交易を妨害されたこと（*ibid*. II: 267–268）も戦争の原因として述べられている。ユカタン半島北部沿岸一帯で採取される良質の塩は、内陸部の人々の食卓に欠かせない調味料であり、村への塩の運搬は共同体の日常行事であった（Landa 1994: 114, *RHGGY* I: 135, 148, 274, 391, 415）。また、海の魚等の海産物は海岸の村々との交易で入手せざるを得なかったため、これらとの交易ルートを阻害されてしまえば不利益が生じたのである。これは沿岸を支配したチェル家が、敵対関係にあった内陸部のココム家（Cocom）が魚や塩を入手するのを妨害していた例に見て取れる（Landa 1994: 99）（図 2）。

植民地期文書に書かれたユカタン・マヤの戦争の記述ばかりに注目すると、秩序ある生活を望んでいたユカタン・マヤ人達がなぜこれだけ「日常的に」戦争をしていたのかという疑問が生じる。当時のユカタン半島北部ではいくつもの王国が互いに支配域を拡大しようと群雄割拠の状態にあったため、その末端である村落共同体がいつ勢力争いの戦争に巻き込まれてもおかしくない状態に置かれていたのは確かである。しかし、彼らの間で戦争を避けようという努力はなされなかったのだろうか。

RHGGY を中心とする史料には戦争の一般的な原因や先住民の戦闘につい

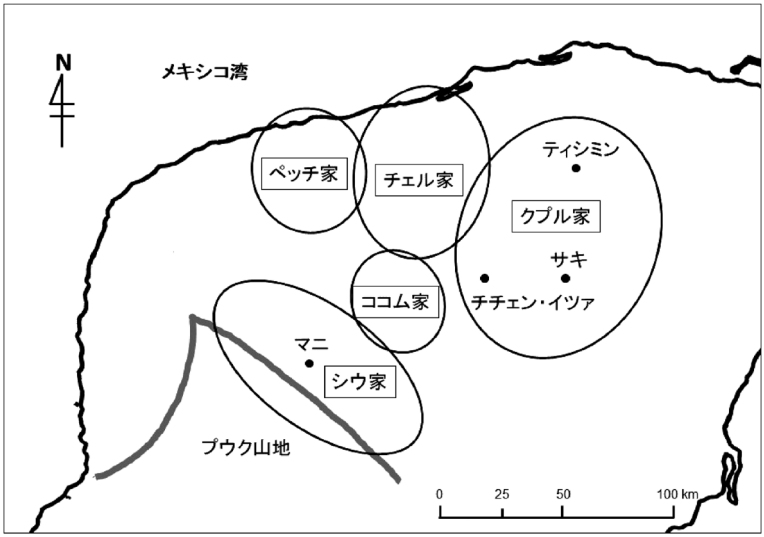

図 2　各氏族の支配域（概略図）

ての簡潔な説明が多いが、武力闘争に入る前に戦争回避の努力が行われていたとみられる記述もある。例えば、シウ家は「戦争よりも策によって（más por maña que por guerra）」統治者達（*batab*）を支配域に取り込んだという（*RHGGY* I: 319）。支配域拡大のために戦争という最終手段に頼るよりも、王権の正統性を誇示、またはシウ家に服従する利を説く等によって当時の領域を平定したのであろう。シウ家は前述のプウク山麓近くのマニ（Maní）に拠点を構える以前からすでに人々の尊崇を受けていた（Landa 1994: 97）。そしてこの「策」の一つに、大越の主張する婚姻同盟があった。地元有力者の娘との婚姻を通してプウク山麓の肥沃な土地に、戦争を起こすことなく進出することができた（Okoshi Harada 2012: 292–293）。他にも、強大な勢力に対して贈り物をすることによって戦争を回避していた例もある。ティシミン（Tizimín）を拠点としていたクプル家（Cupul）は、当時サキ（Zací、現在のバジャドリー（Valladolid）市）を統治していた人物に対し威信財であるスポンディルス貝を贈り、戦争を仕掛けられないように機嫌を取っていた

（*RHGGY* II: 28）[23]。また、姻戚関係にあったシウ家とチェル家が協力してココム家と敵対する等、王国同士が婚姻同盟により共通の敵と対峙することもあった（Landa 1994: 99）。このように他勢力の統治者と姻戚関係を結ぶことは、血を流さずに利を得る有効な手段であった。また先述の「掛売り騒動」にしても、武器を手に急襲することもできたはずだが、「喧嘩」を間に挟み武力衝突はひとまず控えている。さらに言うと、首長や戦闘指揮官自らが武力を誇示して相手の村を訪れる行為を、相手への脅迫と考えることもできる。部隊を引き連れ相手の村落に到着、または村の手前の街道で指揮官同士、もしくは使者を介しての交渉が行われた可能性もある。この際、当事者が謝罪し支払いを履行すれば戦争を避けられたかもしれないが、支払いを拒否すれば当然戦争となっただろう。王国間で行われた婚姻同盟や贈り物等の戦争回避の行動および交渉は、同じように村落共同体の間でも行われていたと推測できる。人々に死をもたらし秩序ある生活を脅かす戦争を、庶民も統治者達も避けられるものであれば避けたかったに違いない。

一方で、武力衝突が不可避であると判断した村落の人々には、村を一時的に捨てて森に逃げるという最後の選択肢が残されていた。これはユカタン半島北部の密な植生という自然環境を利用した行動であった。16 世紀前半のスペインによる征服期間のことだが、スペイン軍が先住民村落に入る直前に住人が食糧等をすべて残して逃亡し、スペイン人が集落に入ったときにはすでに無人となっていたというコンキスタドーレスの証言が年代記にいくつも見られる（Fernández de Oviedo y Valdés 1944 VIII: 175, 181, 210; Díaz del Castillo 2011: 41）。スペイン征服前の先住民同士の争いでも同様に、差し迫る敵に武力で対抗できないが服従もしたくない場合は、森へ避難するという臨時措置がとられたであろう。平坦なジャングルという特有の自然環境に加え、領土所有概念を持たない対人主義に基づいた緩やかな支配域という村落共同体の特徴も、村落の一時的放棄を比較的容易にした要因であったと考えられる。「戦争や不和が原因で首長や神官が村の引っ越しを命じることもあった」（Landa 1994: 144）というランダの記述が示唆するように、もし村が敵に占

領または破壊された場合でも、首長や住人が無事で、村落の人的ネットワークが破断されていなければ、森林のどこか別の場所に村を移転し再建することも可能だったのである。

2　戦争開始後の村落共同体の行動

戦争開始の判断は、基本的に神官 *ah kin*（アフ・キン）が戦争の神々に伺いを立てる、もしくは神官が代々受け継ぐ屏風式に折り畳める本に書かれている時期に従って行われた（*RHGGY* II: 86, 268）。首長は常に神官の忠告に耳を傾けていた（Landa 1994: 96, 98）ので、首長単独で開戦のような重要事項を決断することはなかった。開戦決定後は戦争の神々への祈禱が行われた。通常の祭りでは動物や鳥の心臓を捧げたが、戦場における神々の加護や助けを求めるときは人間を生贄にすることが多かった（*ibid*.: 195–196; *RHGGY* I: 72, 270）。その後、王や首長が戦術・戦略を練るために様々な役割のスパイ（斥候）が敵地や街道に送り込まれ、敵に関する情報を収集した（*CM*: 23, 34, 51, 184; *BMT*: 334）。

戦争の最終目的は敵政体の征服・支配域拡大から、単なる襲撃・掠奪まで様々であったが、戦争における村落レベルでの行動パターンはその最終目的のタイプにより異なった。本稿では紙幅の都合上、村落自体の防衛に関しては扱わず、会戦、待ち伏せ、敵地急襲の 3 パターンについてのみ述べる。偶発的な衝突に関しては、植民地期文書記録、関連語彙のいずれにも記載がないため本稿では扱わない。

植民地期文書にはユカタン・マヤ人同士の戦闘に関する記述が僅かしか見当たらず、スペイン軍と先住民との戦闘を扱ったものがほとんどである。その理由は、報告書、年代記のいずれの記録も征服戦を実際に戦ったコンキスタドーレスの証言が中心であり、先スペイン期の戦闘への読者（スペイン人）の関心の薄さもその要因の一つであろう。しかし、征服戦初期のマヤの戦い方には、自然環境を活かした伝統的戦法、固有の戦争概念等が色濃く反映されていた可能性が高いため、本稿ではスペイン軍の対マヤ戦の記録も参

考にしている。

（1）会戦

王国同士での会戦の流れは次のとおりである。敵と会戦の日時と場所が合意された後、草原等の開けた場所に向かう。両軍が出会うと互いに両翼に展開し、矢石、投槍を交わしつつ接近、激突した（*RHGGY* I: 271）。高い樹木の少ない密林の中で大軍同士が対峙しても思うように身動きが取れず、互いに勝敗を決することができなかったことは想像に難くない。

村落共同体は王国軍の中の一部隊として機能した。会戦では中央に王国の最高統治者 *halach uinic* および最高神官 *ah kin* が指揮する主力部隊、そして両翼に各従属共同体の部隊が展開する（*ibid.* I: 271; *Libro de Chilam Balam de Chumayel* 1941: 5）。そして部隊は旗によって識別された（Landa 1994: 130; *BMT*: 300, 529; Díaz del Castillo 2011: 9）[24]。

両軍が接近し激突した後は部隊ごとの戦闘となり、最終的には戦士同士の一対一の闘いとなった。「一対一の格闘（pelear cuerpo a cuerpo）」のことは *ppizlim muk*（ピスリム・ムック）（*BMT*: 140, 376, 512）または *ppizba*（ピスバ）（*CM*:665）と呼ばれていたが、この語の意味論的分析から、ユカタン・マヤ人は戦場での格闘を「互いのちから（エネルギー）のはかり合い」と捉えていたと考えられる（郷澤 2018: 5–10）。戦士達は格闘によって戦場で対戦相手と力を比べ、力が優った方が相手を捕獲した。戦争捕虜は威信財や食糧等と等価交換できた上に、奴隷としても価値があり、捕獲者と村落共同体に利をもたらした。そのため、敵の殺害より捕獲が好まれた。乱戦の中で戦況の不利を認め、指揮官が退却すると、配下の戦士達も逃げ出した（*RHGGY* II: 324）。そして勝利を確信した側は、敗者を追撃し戦果を拡大、その際多くの敵戦士が殺されるか捕虜にされた（*loc. cit.*）。

戦争での勝敗に関してだが、「戦勝（victoria, rendir en la guerra）」はユカタン・マヤ語で *ɔoyzah*（ツォイサフ、*dzoyzah* とも綴る）（*BMT*: 567, 633）または *baczah*（バクサフ）（*CM*: 64; *BMT*: 567; *DSF*: 16）という語で表された。そ

れぞれの語の文字通りの意味は「（相手を）痩せっぽちにする」「（相手を）骨の（ように痩せた）状態にする」であり、「相手を精神的にも身体的にも衰弱させ、抵抗できないようにした上で、自分の支配下に置き捕虜にする」という概念を持っていた。つまり、奴隷や生贄の獲得、そして捕獲した敵統治者に従属を誓わせることこそが、戦争での勝利を意味したと考えられる（郷澤 2020: 62, 67–69）。統治者や貴族の捕虜は儀式で神々への生贄に供されることが多かったが、平民戦士の捕虜は、一旦捕獲者のものとなった後、一般的に奴隷として売買された（*RHGGY* I: 124, 165, 271; Landa 1994: 130）。または身代金（威信財）と引き換えに敵側へ返還された[25]。ユカタン半島北部では、奴隷は上質なカカオ豆等と等価交換するための主要な「輸出品」であったため、その売買は共同体名義で老貴族達によって行われた（*Códice de Calkiní* 2009: 44–45）。

行軍中や緒戦の部隊展開においては、首長との絆や集団労働の団結心、集団狩猟で培われた合図による組織的行動の成果が発揮された。そして戦闘中も、日頃の団体精神によって協力して敵に立ち向かい、負傷した仲間を救助したであろう。

一方、スペイン軍と先住民軍との戦闘において、戦闘開始の翌日に次々と先住民部隊が援軍として到着したとの記録がある（Fernández de Oviedo y Valdés 1944 VIII: 213; Díaz del Castillo 2011: 10; López Cogolludo 1996 I: 180）。これは王国内でも遠方に位置した従属村落共同体が村ごとに駆けつけたものと考えることができる。その際、補給用の糧食、水、矢等の武器も持参し味方を支援したのである（Díaz del Castillo 2011: 10）。

（2）待ち伏せ

ロイズが指摘するように、植民地期文書の記録からスペイン人と先住民の戦闘の多くが村同士を結ぶ本道で展開されていたことがわかる（Roys 1972: 67）。要因としては、道を脇へ一歩外れると熱帯の植生や底の深い湿地等のために大人数での通行が困難であったことが挙げられる（Fernández de Ovie-

do y Valdés 1944 VIII: 212）。また、通行量が少ない間道は灌木や倒木、生い茂る蔓植物により半ば閉じていることが多かった。そのため行軍するにはそれらを切り開いて進むことになり戦闘どころではなかったのである（*ibid*. VIII: 175, 213）。以上の理由から、敵軍が侵攻ルートを選ぶ場合、その人数が多ければ多いほど自ずと本道に限定された。一方で、視界が悪く伏兵に適した箇所というのは、侵攻される防御側が熟知していた。そのため地形と環境を最大限活用できる主要道の数ヶ所で待ち伏せするのが、敵の侵略を阻止、撃退し村を守るために最適な戦術だった。

奇襲の一種である待ち伏せの方法は、まず村落共同体に通じる本道の草木が密生したところで、木材や枝を組み木々に縛りつけヤシの葉や草でカモフラージュを施した半月状の防御柵を作る。そして柵の裏側には弓、投石、槍の戦士を、その手前の道沿いには道から矢の射程分離れた箇所に地面に伏せた大勢の戦士を配置し、周りを取り囲んだ（*ibid*. VIII: 210; *RHGGY* I: 68; Landa 1994: 130）。周囲の森の景色と同化していたため敵が防御柵に気づいた時点では、すでに部隊全体が道の前後と両脇から取り囲まれた状態に陥った。そして四方から弓矢や投石器（スリング、石を投げるための紐状の道具）、投槍（道具は用いず手で投げられた）、短槍で攻撃され（*RHGGY* I: 68; Fernández de Oviedo y Valdés 1944 III: 305, VIII: 210, 212）、敵は負傷と恐怖、絶望から降伏し、捕獲されたのである[26)]。一方で、敵の侵略の意図を事前に把握し、敵が本道を進軍するという確実な情報を得た場合は、カモフラージュを施した柵ではなく、石や丸太を強固に組んだ壁を幾重にも構築し迎撃した（*ibid*. VIII: 212; *RHGGY* I: 124; López Cogolludo 1996 I: 188）。

このように道の両側に沿って戦士を配置し、道を防御柵で蓋をし「見えない袋小路」を作り出し、その狭い空間に敵勢力を閉じ込める戦法を、ユカタン・マヤ語で *hobon*（ホボン）と呼んだ。語彙集の説明は以下の通りである：

III-3. 1. *hobon*「待ち伏せ、戦争での騙し討ち（celada, engaño de guerra）」（*BMT*: 225）

III-3. 2. *oci ca nupob ichil ca hobon*（オキ・カ・ヌポブ・イチル・カ・ホボ

ン）「我々の敵を待ち伏せの罠にかけた（Metió a nuestros enemigos［Entraron nuestros enemigos］en nuestra celada.）」（*loc. cit.*）。このマヤ語文を文字通りに翻訳すると「我々の敵達が待ち伏せの中に入った」となる。

しかし、*hobon* という語には元来以下のような意味があった：

III-3. 3.　*hobon*「空洞になっているもの（cosa hueca）」（*CM*: 316）、「空洞（hueco）」（*DSF*: 638）、「ミツバチの巣箱 / 木の洞（el corcho o colmena de las abejas / el hueco interior que crían los árboles）」（*DLM*: 180）

III-3. 4.　*hobon che*（ホボン・チェ）「空洞になった木や丸太（árbol hueco o madero así）」（*BMT*: 109）

III-3. 5.　*u hobon cab*, *u hobonil cab*（ウ・ホボン・カブ、ウ・ホボニル・カブ）「空洞になったミツバチの巣箱（colmena hueca）」（*DSF*: 141）、「ミツバチの巣箱の空洞または空になった巣箱（lo hueco de la colmena o colmena vacía）」（*CM*: 316）

つまり、*hobon* には「空洞」「内部が空洞のもの」という基本的意味があり、この語に木を表す *che* がつくことで「洞のある木・丸太」、そしてミツバチや蜂の巣、蜂蜜を表す *cab* がつくことで、丸太の中身を刳（く）り貫いて作った蜂蜜を採取するための「丸洞式巣箱」を意味した。後古典期後期当時のユカタン半島北部では養蜂が盛んで、この現代ユカタン・マヤ人の間でも利用され続けている伝統的巣箱についてはランダも言及している（Landa 1994: 206）。そのため、現代でも *hobon* といえば丸洞式巣箱のことを指すのと同様に、後古典期後期ユカタン・マヤも *hobon* の意味を拡張し、この語だけで例 III-3. 3 の説明にあるように「丸太の巣箱」を指していたと考えられる。

先程の例 III-3. 2 に改めて注目してみると、「木の洞に敵が入る」と表現するよりも「丸太の巣箱に敵が入る」と表現した方が、敵が待ち伏せ戦術に見事にかかったことを想起させやすい。実際の丸洞式巣箱は、丸太の両側の切

り口に木材等で人工的に蓋をし、幹の中央部に 1 センチメートル程の穴を開ける。つまり、狭い入口を通って大量のミツバチが中の空洞に入り密集した状態は、森が密生した狭い道を進み、防御柵のある奥まで入り込んだところで包囲された敵軍の様子と類似している。巣の出入口を塞がれたミツバチのように、敵は「空洞」内で混乱したことであろう。取り囲み不意打ちすることで相手の平常心を掻き乱し、騒ぎと混乱を引き起こすという *ppuh* の基本概念は巻き狩りとも共通する。そのため村落共同体の狩猟指揮者 *ah meknak ppuh* が待ち伏せの指揮を兼任していた可能性も考えられる。

（3）敵地急襲

これも奇襲の一種であるが、王国軍によって敵の拠点を相手に通告することなく突然襲う、もしくは地方において村落共同体が近隣の敵村に単独で仕掛ける攻撃のことである。その目的は単なる掠奪、破壊から敵の征服まで様々であった。「通告なく」とはいえ、常に良好な関係にあった相手を襲うのではなく、すでに敵対関係にあった相手に対して行われることが一般的であったと考えられる。

夜明け等に敵の拠点または村に忍び寄り周囲を取り囲む、または防御が手薄な地点から侵入する。そして、頃合いを見計らって突然大声を上げ住民や防衛軍を混乱させた。他方で、雄叫びや太鼓等の戦場楽器の音を立てず静かに襲いかかる場合もあった（Fernández de Oviedo y Valdés 1944 VIII: 181）。侵入後は防御する敵と格闘し、平民戦士、貴族、統治者だけでなく女子供含むその他の住民も可能な限り捕獲した。そして家々を掠奪、放火した後、戦利品、戦争捕虜とともに撤退した（*RHGGY* I: 271）。この敵地急襲でもやはり前述の *ppuh* の概念の実行が行動パターンの基本となった。

戦争捕虜の扱いについては本項「（1）会戦」で述べた。戦利品は、統治者や貴族の取り分である威信財を除き、共同体に帰ってから均等に参加者に配分された（*ibid.* I: 378）。巻き狩りでも獲物の肉は参加者全員に平等に割り振られたが、村落共同体内ではメンバー全員が助け合い、負担も利益も公平に

分割する精神が根付いていたことがわかる。

Ⅳ　考察

これまで述べてきたことをユカタン・マヤの社会システム、慣習、そして彼らの日常意識の点からまとめ、村落共同体とそこに暮らす平民男性にとっての戦争の全体像について考える。女性の立場からの戦争観は戦士として戦場で闘った男性とは異なるため、今後の課題としたい。

庶民の日常意識の中では、戦争という暴力や死を伴う活動は彼らの宇宙観において重視される秩序を乱す要因の一つであったため、できることなら避けたかったはずである。そのため統治者も交渉や策によって戦争回避の努力をした。村落レベルで言えば、首長が責任者として隣村の首長との交渉に当たり、話し合いで穏便に済ませる、または和解のしるしとして威信財を贈る等、武力に頼らない問題解決が図られたことであろう。

しかし一度開戦が決定されると、戦士としての戦争参加は平民にすんなりと受け入れられた。なぜなら兵役が *koch*、つまり共同体の一員として共同体の利益のために果たすべき自然な負担として認識されていたからである。この複数で自然に「担ぐ（負担する）」ものという *koch* の概念が彼らの戦争観の根幹部分であったと我々は考える。一律に課された兵役は個人的に拒否できる責務ではなかった。とはいえ、戦争のたびに健康な成人男子全員が出征するとは限らなかった。例えば、隣村とのいざこざ等の小規模な戦闘であれば村の勇士 *holcan* 達を揃えるだけで十分であった。一方、王国同士の会戦に召集された場合等は、平民からさらに多くの戦士を募る必要があったが、その際も村落防衛のためにある程度の男性が残された。このように互酬、即ち集団労働システムのローテーション制を活用して、平民男性は出征と、留守および戦士への食糧拠出の役割を交替で担ったのである。ただし、もし戦場へ行く順番が回ってきたにもかかわらずそれを拒否した場合は厳罰に処されただけでなく、*koch* を怠ったことで村落共同体の一員としての資格を失い追放されることもあったであろう。

このように、庶民は基本的には首長からの指示に従って双務的義務の一環として戦争に参加していたので、その戦士としての働きに対しては報酬を求めなかった。その代わり、戦場での戦利品の分け前に与れた上に、捕らえた戦争捕虜の売買による利益という普段は得られない「臨時収入（掠奪品）」が、男性に積極的な戦争参加を促す要素となっていたと考えられる。他方で、自分達の土地を勝手に耕され使用される、妻子が連れ去られる等、自分と拡大家族に被害が及んだ場合は相手に対する復讐が直接の動機となったであろうことは想像に難くない。旱魃、飢饉の年にトウモロコシを強奪された場合はなおさらである。いずれにせよ、*cah* の生活秩序や利益を守るために戦うという意識は平民達の間で共有されていたに違いない。

戦争に備えた特殊な集団訓練は行われなかったと考えられるが、平民達は食肉の調達と儀式で生贄にする生きた動物確保のために日頃から実施していた集団狩猟によって、戦場で役立つ技能を自然な形で身につけていた。「ターゲットに静かに近づき包囲し、突如驚かし混乱させた後に襲う」という巻き狩り *ppuh* での行動パターンは、密林での待ち伏せや敵地を急襲するときに効果が発揮された。

戦場では、平民戦士は重層的な連帯感で結ばれた村の首長、*nacom* や *ah meknak katun* 等の戦闘指揮官、地元貴族、神官、そして日常の仲間である近所の互酬グループ、自分の親族らと一つの部隊 *tzucul katun* を組み行動を共にした。全員気心知れた人達であり、普段から助け合う間柄であった。首長とも訴訟調停や祭り等の行事を通して緊密なコミュニケーションを取っていた。その結果、平民戦士は首長をはじめとする指揮官への揺るぎない信頼と従属を戦闘中も保ち続けたと考えられる。同じ共同体の人々の間でも、仲が悪く互いに嫌悪する関係もあったに違いない。とはいえ、本研究で明示したデータのいずれもが村落共同体 *cah* に属する人々の強固な団結力を裏付けている。要するに、平民にとっての戦争とは、起きてほしくないと願いつつもいずれは起こる「悪いこと」であったが、いざとなれば日常の他の集団活動と同じ要領で、村の仲間と協力し助け合って自分達の生活秩序と利益を守る

目的で武器を取って行う、日常の延長線上の活動であったと言うことができる。同時に、掠奪品が得られるチャンスでもあったわけである。

では、王国 *cuchcabal* の支配域拡大や防衛に伴う戦争に王国軍の一員として召集された際の *cah* の人々の王や王国に対する考え方はどのようなものだったのだろうか。王 *halach uinic* の視点から見れば、対人主義の概念によって、自分に臣従する首長が暮らす村落全体が王の支配域に属した。故に、王が戦争のために支配下の *cah* を召集した場合、その住民も首長からの指示を受け当然応援に向かうものと考えていた。出兵は普段受けている宗教儀礼の恩恵や軍事的庇護に対する双務的義務として、臣民が果たすべきものであったからである。しかし、王国の拠点やそこに居住する王のことを、そして同じ王国に属する他の村落の人々のことを、首長や平民が果たしてどれだけ「仲間」、言い換えれば自分達と人的ネットワークで繋がった人々と捉えていたであろうか。

平民は塩の運搬や生活必需品の交易、チチェン・イツァ（Chichén Itzá）やコスメル（Cozumel）島、マニ等への「聖地巡礼」を通して半島北部各地に足を運ぶ機会があった。一方で、彼らにとっての日常の生活空間の核は、自分や家族が住み耕作地がある村落共同体内に加え、姻戚が暮らし交易等を通して日々交流がある近隣の村々や森等の周縁であった。しかし同時に、遠く離れて暮らしている親族との絆も大切に維持していた。ユカタン・マヤ人の日常社会空間の周縁は、遠くの塩田や巡礼地までの道程も日常空間と捉えていたとすると、「王国」の所属の違いを超えて我々の想像以上に遠くへと押し広げられていたと考えられる。同盟関係にあった村落同士も同じ社会空間と認識されていたであろう。

では王国の人々との絆についてはどうであろうか。祭りや宴会、儀礼等のイベントで王国の拠点に呼ばれた際には飲食を伴う交流があり、同じ王国に属する人々同士で親交が深められたはずである。首長や臣下貴族は、それ以外にも王が同席する儀式や会議で他村落の首長らと顔を合わせることも多かったので、平民よりも王国のメンバーとしての互いの認識を強めていたに

違いない。したがって、戦場でも互いに味方という意識はあり、ある部隊が苦境に陥れば救援に向かったであろう。しかし、戦場での集団行動に関して言えば、村落外の王国の人々との個人的な絆よりも、自分達の村落共同体の人々とのチームワークと日頃の信頼関係の方が圧倒的に強いつながりであった。日常的相互依存関係で結ばれていない王国の人々との親交は重層的連帯感まで発展することは考えにくく、平民に「王国の一員」「王国のために戦う」という意識があった可能性は低いだろう。結果として王国軍の実情は、村落共同体部隊同士の横の連携が存在しない、共通の王 *halach uinic* または地方有力者 *batab* という中心点で結ばれた「部隊」の寄せ集めであり、一個の王国軍としてのまとまりのある統率の取れた攻撃や防御を行うことは困難であったと推測する。語彙集に「部隊」を意味する用語が「全体を構成する一塊」を意味する *tzucul katun* 以外見当たらないこと、そして植民地期文書に陣形を組む等の複雑な戦術に関する記述が存在しないのもこれが理由の一つであろう。その代わり、それぞれの部隊単位での団結は揺るぎないものであったため、王が苦戦している味方に数個の部隊を援軍として送る等の対応においては効果を発揮したであろう。

王国同士の会戦においては、平民戦士の戦う動機が「首長と自村落のために」*koch* を果たすこと、そして捕虜・戦利品を獲得するという *cah* と家族の利のためであったことは間違いない。しかし、村落共同体の庶民が「王や王国のため」という概念を持って戦っていたかは疑問である。

おわりに

本稿では、これまで近代軍事理論を前提とし社会活動と切り離して議論されてきたユカタン・マヤの戦争について、村落共同体 *cah* に暮らす庶民の日常生活との関連性に焦点を絞り分析を行った。そのための方法として植民地期語彙集に記録されている単語の意味の多義語分析を用い、その結果をマヤ人のものの見方や考え方、特に *koch* の概念と庶民の兵役に対する考え方、そして *ppuh* の概念と部隊の攻撃概念との関連性についての議論に援用した。

これらの復元された概念をもとに、当時のユカタン・マヤ社会の平民達が村落共同体の一員としてどのように戦争という現実と向き合って暮らしていたかについて考察を加えた。他方では、庶民についてだけでなく、彼らと双務的関係で結ばれていた村落共同体の首長 *ah cuch cab* の対人主義に基づいた庶民に対する態度についても論じた。首長がいかに日頃から村落共同体の生活秩序と庶民の利について考え、これが侵害されそうになった時は彼らのために奔走し、戦争回避の努力空しく開戦となった場合も、戦場で他の指揮官達と共に彼らをいかにまとめ上げ団結して戦ったかという、統治者と庶民の関係にも光を当てた。

ユカタン・マヤに限らずメソアメリカの戦争研究では、現在に至るまで武器や戦術、軍隊等の「軍事力」自体に研究者の関心が集まっている。しかし、戦争は社会現象であるということを忘れてはならないだろう。彼ら先住民の政治社会システム、宇宙観、日常意識、そして戦争の背景や動機を総合的に理解することで、社会構造と軍事構造のつながりが少しずつ見えてくるのである。とはいえ、我々の現代社会とは異なるユカタン・マヤ社会を理解するのは容易ではない。史料の様々な記述や 400 年以上前に使われていた彼らの言葉を比較分析するだけでなく、マヤ語を母語とし、自分達の伝統文化や固有の価値観を次世代への伝達手段として積極的に使用し続けている現代ユカタン・マヤ人の助けを借りることも、我々が気づかなかった彼らの固有概念の理解につながることだろう。

* 本稿の執筆にあたり、京都外国語大学の大越翼氏および慶應義塾大学の加藤伸吾氏に多くの有益なご指摘をいただいた。また二名の査読者には細部にわたり的確なご助言を賜った。記して謝意を表したい。

註

1）　本稿では、ユカタン半島北部の後古典期後期の終わりは、同地域の征服が終了した 16 世紀と便宜上定める。しかし、チアパスやグアテマラを含む広大なマヤ地域全体では、征服の完了時期が地域により異なるため「スペインに

よる征服の完了まで」と定義される。

2） この「辞典」は上記の 4 冊の語彙集を含む植民地期に編纂された写本をもとに作成されたため、二次史料として扱われる。しかし、編者が長年の内陸マヤ人村落滞在中に先住民から直接聞き取った当時（19 世紀）の単語とその意味も記録されており（*DLM*: V）、他の語彙集に対し補完的な役割を果たす。

3） *cuchteel*（クッチテエル）ともいう（Okoshi Harada 2012: 289; *CM*: 144; *BMT*: 504; *DSF*: 517）。

4） 以下、語彙集の中で植民地期当時の綴り（例えば［*c*］を［*ç*］、［*i*］を［*y*］等）で書かれているスペイン語原文については、読者が読みやすいように現代スペイン語の綴りに修正してある。

5） 首長の名称は *ah cuch cab* が一般的だったが *holpop*（ホルポップ）という役職の者が首長を務める場合もあった（*RHGGY* I: 134, 390）。

6） 植民地期のカ行の綴りには［*c*］と［*k*］がある。［*c*］（現代ユカタン・マヤ語アルファベット記号では［*k*］）は通常のカ行を表し、［*k*］（同［*k'*］）は声門閉鎖音（通常のカ行より強い発音）を表す。

7） *ma bahun* は「たくさん」を意味する（*CM*: 476）。

8） *oczah* はこの場合「認める、受け入れる」を意味する（*ibid.*: 583）。

9） 動詞 *miz* は「草を取り除き道を掃く、きれいにする、新しくする」（*ibid.*: 521）、*be* または *beil* は「道」（*ibid.*: 81–82）をそれぞれ意味する。

10） *uayak* は「夢を見る、夢」を意味する（*ibid.*: 746）。

11） *che* は「木（全般）、丸太、棒」を意味する（*ibid.*: 232）。

12） *-tah* は過去形や受動態を表す接尾辞（*BMT*: 35; *AIM*: 207）。

13） *ti* は前置詞（この場合は「～で」）（*CM*: 711）、*yab kaan* は「ハンモック」（*ibid.*: 357）、*kohan*, *kohaan* は「病人」（*ibid.*: 430）をそれぞれ意味する。

14） ［ɔ］［*dz*］もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベットの［*ts'*］は声門閉鎖音であり、通常のツァ、ツェ、ツィ、ツォ、ツより強い発音。

15） 短槍の穂先や鏃の原料のチャート、柄に用いた *habin*（ハビン）と呼ばれる堅い木、弓に用いた強くしなやかな木の芯、矢柄に用いたアシ、弦に用いたエネケン（リュウゼツラン科）の繊維紐、防具に用いた綿、穂先と柄を結ぶためのツタ等はすべて村落周辺の森や湿地で手に入った。

16） ランダによると、石のビーズ（恐らくヒスイ）やカカオ豆、スポンディルス貝が「moneda」として物々交換に利用されていた（Landa 1994: 118）。

17） *mac* は「箱や壺等の蓋（tapa de caja, tapadera de vasija o cerradura y puerta, la que se abre y cierra）」（*CM*: 480）「蓋をして閉める（cerrar tapando o encajando y tapar así）」（*ibid.*: 479）、*kab* は「手（mano o todo el brazo del hombre o de otro

animal)」(*ibid*.: 396)「手仕事(cualquier obra o trabajo de manos)」(*loc. cit.*)、*nah* は「値する、相応しい(merecer, ser digno)」(*CM*: 544)、*bool* は「望みや欲を満たす(satisfacer a la voluntad y deseo)」(*ibid*.: 90)という基本的意味を持っていた。

18)　もともと一つの意味のみ有していた単語から、長い年月かけ基本的な意味をずらして用いることで従来と異なる新たな意味が生まれることを意味の拡張、または意味変化と呼ぶ(松本 2003: 73–74)。

19)　*-cinah* は他動詞化するための接尾辞である(*BMT*: 32)。

20)　[*pp*] もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベットの [*p'*] は声門閉鎖音であり、通常のパ行より強い発音。

21)　*CM* では現代ユカタン・マヤ語の *ma'*(スペイン語の「no」を意味する)に相当する語が、転写の際に「*maa*」と長母音であるかのように書き直されている。しかし、この語の発音は声門音 [a'] である上に、他の辞典ではいずれも「*ma*」と記載されているため、本稿でもそのように記す。

22)　*-bezah* は強制動詞を形成するための接尾辞である(*BMT*: 31)。

23)　スポンディルス貝はカカオ豆や奴隷と交換できる威信財であった(*RHGGY* II: 44)。

24)　メソアメリカ中央部では味方を攻撃しないように各村の部隊ごとに旗を掲げた(Durán 2006 II: 166)。

25)　動詞 *loh* は「捕虜を請け戻す(redimir al cautivo)」という意味を持ち(*BMT*:563)、また *lohebal baczah* で「捕虜のために払われる身代金(rescate, lo que se da por el cautivo)」を意味した(*CM*: 465)ことから、売買だけでなく人質交換でも利益を得ていたことがわかる。

26)　各武器のユカタン・マヤ語での名称は弓 *chulul*、矢 *halal*、投槍および短槍 *nabte*、丸盾 *chimal*(*RHGGY* II: 324)。投石器は *yumtun* または *yuum tun*(*DSF*: 424, 636; *AIM*: 309)。

参考文献

大越翼．2005.「対立と融合と」(貞末尭司編『マヤとインカ：王権の成立と展開』同成社)，139–152 ページ.

郷澤圭介．2018.「ちからをはかる：後古典期マヤの戦闘の一概念」京都外国語大学ラテンアメリカ研究所『紀要』18 号，1–23 ページ.

———．2020.「痩せっぽちと骨－後古典期後期ユカタン・マヤにおける「戦勝」概念の認知意味論的分析－」『古代アメリカ』23 号，51–77 ページ.

松本曜編．2003.『認知意味論』大修館書店.

Beltrán de Santa Rosa María, Pedro. 2002［1746］. *Arte del idioma maya*（*AIM*）, edición anotada y crítica de René Acuña（México: UNAM）.

Bocabulario de maya than（*BMT*）. 1993［ca. 1670］. René Acuña（ed.）（México: UNAM）.

Calepino de Motul（*CM*）. 1995［ca. 1617］. Ramón Arzápalo Marín（ed.）, tomo 1（México: UNAM）.

Códice de Calkiní. 2009. Introducción, transcripción, traducción y notas de Tsubasa Okoshi Harada（México: UNAM）.

Crónica de Yaxkukul. 1926［1574］. Juan Martínez Hernández（ed.）（Mérida: Talleres de la Compañía Tipográfica Yucateca）.

Díaz del Castillo, Bernal. 2011［1632］. *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, introducción y notas por Joaquín Ramírez Cabañas（México: Editorial Porrúa）.

Diccionario de San Francisco（*DSF*）. 1976［n.d.］. Oscar Michelon（ed.）（Graz: Akademische Druck - u. Verlagsanstalt）.

Durán, Diego. 2006［1581］. *Historia de las Indias de Nueva España e islas de tierra firme*, la prepara y da a luz Ángel Ma. Garibay K., 2 tomos（México: Editorial Porrúa）.

Fernández de Oviedo y Valdés, Gonzalo. 1944［1851–1855］. *Historia general y natural de las Indias: Islas y tierra-firme del mar océano*, prólogo de J. Natalicio González, notas de José Amador de los Ríos, tomos 3, 8（Asunción: Editorial Guarania）.

Farriss, Nancy. 1984. *Maya Society under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*（Princeton: Princeton University Press）.

Gozawa, Keisuke. 2017. "La guerra entre los mayas del Posclásico Tardío: Conceptos, prácticas y proceso de expansión". Tesis de doctorado en Estudios Mesoamericanos, UNAM en México.

Hanks, William F. 2010. *Converting Words: Maya in the Age of the Cross*（Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press）.

Hassig, Ross. 1992. *War and Society in Ancient Mesoamerica*（Berkeley: University of California Press）.

Landa, Diego de. 1994［1566］. *Relación de las cosas de Yucatán*, estudio preliminar, cronología y revisión del texto por María del Carmen León Cázares（México: CONACULTA）.

Lenkersdorf, Carlos. 2006. *La semántica del tojolabal y su cosmovisión*（México: UNAM）.

Libro de Chilam Balam de Chumayel. 1941［n.d.］. Prólogo y traducción del idioma

maya al castellano por Antonio Mediz Bolio（México: UNAM）.

López Cogolludo, Diego. 1996［1688］. *Historia de Yucatán*, 3 tomos（Campeche: H. Ayuntamiento de Campeche）.

Montiel Ortega, Salvador, Luis M. Arias Reyes, Federico Dickinson. 1999. "La cacería tradicional en el norte de Yucatán: una práctica comunitaria" en *Revista de geografía agrícola*, No. 29, pp. 43–52.

Okoshi Harada, Tsubasa. 2012. "Postclassic Maya "Barrios" in Yucatán: An Historical Approach" in M. Charlotte Arnauld, Linda R. Manzanilla, Michael E. Smith（eds.）, *The Neighborhood as a Social and Spatial Unit in Mesoamerican Cities*（Tucson: The University of Arizona Press）, pp. 286–303.

Papeles de los Xiu de Yaxá, *Yucatán*. 2001. Sergio Quezada y Tsubasa Okoshi Harada（eds.）（México: UNAM）.

Pérez, Juan Pío. 1877. *Diccionario de la lengua maya*（*DLM*）（Mérida: Impresa literaria de Juan F. Molina Solís）.

Quezada, Sergio. 1993. *Pueblos y caciques yucatecos*, *1550–1580*（México: Colegio de México）.

Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán（*RHGGY*）. 1983［1579–1581］. Mercedes de la Garza（coord.）, 2 tomos（México: UNAM）.

Repetto Tió, Beatriz. 1985. *Desarrollo militar entre los mayas*（Mérida: Maldonado Editores, INAH, SEP）.

Roys, Ralph L. 1972［1943］. The Indian Background of Colonial Yucatan（Norman: University of Oklahoma Press）.

Ruz, Mario Humberto. 1992［1985］. *Copanaguastla en un espejo*, *un pueblo tzeltal en el virreinato*, segunda edición（México: CONACULTA, INI）.

Sahagún, Bernardino de. 2006［1585］. *Historia general de las cosas de Nueva España*, numeración, anotación y apéndices por Ángel Ma. Garibay K.（México: Editorial Porrúa）.

Tejeda, Eduardo Arturo. 2012. "La guerra en las Tierras Bajas Septentrionales mayas durante el Posclásico Tardío: Organización, desarrollo y táctica militar después de la caída de Mayapán". Tesis de licenciatura en Arqueología, ENAH en México.

〈Resumen〉

El significado de la guerra para los habitantes de las comunidades aldeanas mayas yucatecas del Posclásico Tardío Terminal

Keisuke GOZAWA

El presente artículo tiene como objetivo ofrecer una nueva interpretación sobre la organización militar maya de las tierras bajas del norte del periodo Posclásico Tardío Terminal (del siglo XIV al XVI EC), enfocándose en las comunidades aldeanas llamadas *cah*, unidad mínima administrativa, y los comportamientos y pensamientos del pueblo en cuanto al fenómeno bélico desde la perspectiva indígena.

A diferencia de los estudios realizados sobre la guerra maya, que tendían a comprender dicha organización a nivel estatal aplicando teorías militares modernas y modelos de otros continentes, este artículo parte de la premisa de que los componentes de su equipo militar eran básicamente la gente común, por lo cual es imprescindible analizar la vida sociopolítica cotidiana de estos.

Se emplea el método lingüístico llamado “Análisis de campo semántico”, el cual sirve para reconstruir algunos conceptos tradicionales autóctonos que no se encuentran escritos en las fuentes documentales. Para dicha metodología se utilizan los vocabularios de maya yucateco recopilados durante los siglos XVI–XIX. En concreto, dicho análisis de los términos relacionados con lo militar y el estudio minucioso de los documentos mayas y españoles colo-

niales, nos permiten revelar una estrecha interrelación entre las actividades ordinarias del común del pueblo, la organización y las prácticas militares.

El término *koch* (explicado en los vocabularios como "obligación"), que se cumplía recíprocamente entre los habitantes del *cah*, incluyendo al jefe aldeano *ah cuch cab*, tendría la acepción de un cargo o carga que se lleva entre más de dos personas y que se cumple de *modo natural*. Este concepto maya nos muestra que su "obligación" de trabajar para el bien común del *cah* no se consideraba "forzosa", sino algo natural y axiomático que uno hacía al ser miembro de la comunidad, al igual que la del jefe aldeano de realizar un buen gobierno y proteger la vida e interés de su gente. Cumpliendo sin falta esos cargos, se establecían vínculos bilaterales entre ellos, fortaleciendo la solidaridad comunal, convirtiéndose en una sola unidad combatiente y no solo sociopolítica. Debido a que el servicio militar se consideraba como *koch*, la gente lo aceptaba sin cuestionar ni exigir recompensa alguna, aunque la repartición de despojos y toma de prisioneros posteriores, les motivaban de cierta manera a ir al campo de batalla. Siendo el servicio militar un trabajo grupal, aplicaban un sistema de rotación a modo de reclutar a los habitantes: mientras que unos salían del pueblo como guerreros, otros se quedaban en él para su defensa, además de proveer alimentos a los combatientes, de tal manera que compartían cargo y compromiso militar entre todos.

El evento ordinario de cacería en comunidad, llamado *ppuh*, se realizaba en grupo para obtener carne y animales vivos para sacrificarlos a los dioses. Pero al mismo tiempo les servía como ejercicio para aprender a comunicarse por señas y moverse de manera coordinada en el monte, siendo efectivos concretamente durante la celada y el ataque sorpresa. Por otro lado, el término *ppuh* tendría acepción de incitar a los que están calmados y en orden para provocarles caos. Este concepto representa el principio del ataque en la selva frondosa al igual que el de la cacería comunal.

Teniendo estos conceptos, la gente común guerreaba formando un escuadrón bajo mando del jefe aldeano con algunos capitanes nobles con los que se unían por vínculos personales cotidianos. A causa de aquellos fuertes eslabones, el pueblo luchaba principalmente para beneficiar a su jefe directo, su familia y su comunidad, y al parecer sin el objetivo directo de beneficiar a su rey y a su gobierno central con los cuales convivían menos en su espacio social cotidiano.